

# Newsletter

No. 21

秋田英語英文学会



## Akita Association of English Studies

AAES Newsletter No. 21

発行代表者: 佐々木 雅子

2021年(令和3年)9月28日発行

発行所: 秋田英語英文学会(AAES)事務局 〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1 秋田大学教育文化学部

### Essence in academia

What research brings us is interesting and sometimes makes us realize what we should have noticed earlier. Professor Kazuki Sasaki has been always introducing essence of life from the world of Shakespeare. This is part of his research product for our life.



佐々木 和貴 (秋田大学 教授)

#### 『ロミオとジュリエット』を「読む」ということ

今年3月に一旦退職しましたが、現在、特別教授という身分で、あと1年だけ、秋田大学に在職しています。そこで今年は英語教育コースでの最後の専門の授業として、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を読みました。なぜ、『ロミオとジュリエット』なのか。その理由はふたつあります。

第一には、もちろん、それが英語で書かれた最も有名な文学作品のひとつだからです。シェイクスピアの芝居の名台詞・名場面は、わたしたちが中学・高校で日本の古典のさわりを学んだのと同様に、英語圏の「国語」の授業で取り上げられています。なかでも、『ロミオとジュリエット』の通称「バルコニーのシーン」は、「ロミオ様、ロミオ様、どうしてあなたはロミオ様なの？」というジュリエットの台詞とともに非常に有名です。ですから、英語圏の人なら誰でも一度は読んだ、あるいは聞

いたことがあるでしょう。つまり、『ロミオとジュリエット』を「読む」ということは、学生諸君にとって、まさにこうした古典的な意味で、英語教師に必要な「教養」のエッセンスを吸収することに他なりません。

第二には、その知名度にもかかわらず、この芝居の深いメッセージが理解されていないからです。たとえば、『ロミオとジュリエット』には、常に若い男女の甘い恋というイメージがつきまといまいます。(この芝居が、ハッピー・エンドであると思いこんでいた学生もいたほどです。)しかし実はこの物語には、それと同じくらい重要な要素として、モンタギュー家とキャピュレット家という二つの名家の長年にわたる憎しみという外枠があります。だからこそシェイクスピアは、この物語を、恋人たちの心中場面ではなく、親たちが和解し、両家の憎しみが一人息子と一人娘の死によってようやく収束した場面です。つまり、恋人たちが自由に愛し合える世界は、二人の死という代償を払って、はじめて生まれたのです。そこに気がつけば、ここで語られているのが、憎しみが引き起こす「暴力の連鎖」の恐ろしさと、それを終わらせることがいかに困難であるかというテーマであり、この物語が今も世界中で起こっている深刻な問題と共振していることがわかります。想像力を鍛えて、古典を今の世界につなげること。『ロミオとジュリエット』を「読む」ということは、このような意味で、学生諸君が新しい型の「教養」を身につけるための、格好の練習場にもなるでしょう。

英語圏の著名な文学に関する知識と理解、そして、それを今・ここに引きつけて考えることができるしなやかな想像力。この二つの「教養」をともに身につけることが、学生諸君にとってこの困難な時代を切り拓いていくために役立つだろうと思って、最後の年に『ロミオとジュリエット』を読んでみました。もちろん、今年蒔いた種が花開くとしても、それは彼ら／彼女らの5年後、10年後という気の長い話なのですが...

# Many Thanks for ACES

## Reflecting back on ACES, Akita Communicative English Studies

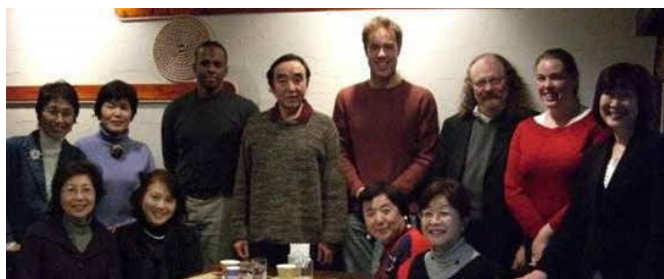


木村 美穂 Kimura Mio

**I**t was a big surprise to know that the date when I sent a notice of retiring our ACES activities on August 10, 2021 came after 18 years when we had started ACES on August 9, 2003. I joined the group on January 17, 2002. At that time its name was AES TEFL, the Association of Akita English Studies, Teachers of English as a Foreign Language and was founded by Kono Minoru sensei and Sasaki Masako sensei on August 9, 1999. There were two parts called Academic Sessions and Skill Training. Both ALTs and JTEs were involved in those activities with challenging goals I remember.

According to the invitation notice, it says their mission is to link English language teaching professionals in Akita Prefecture and provide them with opportunities to study different themes and cooperate to solve various underlying problems in English education in Japan (Academic Session) as well as to improve their English proficiency level (Skill Training).

Unfortunately, in 2003, they were about to stop their activities so that we had a talk among the members. I was one of the members who wanted to continue the activities, so we decided to take it over with a new name, ACES.



*With Happy Smiles!*

The last ACES was held on Sunday, September 27, 2020. There were 354 sessions including the previous activities. Thorfinn Tait gave us a speech 16 times and so did Tim Ernst 13 times. We met more than 160 guest speakers from all over the world with a wide range of topics. Looking back on their topics there were quite a lot on politics and social issues. Some speakers were young ALTs and others were skillful English teachers and professors. I invited some of the family members of them when they visited Akita. They were all friendly and gave us opportunities to communicate in English interacting each other.



*\* With Enthusiasm \**

Some ACES members say as follows: The good memories will be cherished as long as I live; The topics were stimulating and inspiring each time; Listening to their speeches not only made my English skills improve but also expanded my knowledge; We had priceless presentations, talks, encounters with people from various parts of the globe; ACES always encouraged me to study more for a long time.

Everything has an end, so I think what we chose was right to do. If possible, I hope some people will start a new activity something similar to what ACES has done. On behalf of ACES members, I'd like to express our gratitude for all the teachers concerned from Akita University and guest speakers who dedicated their time and efforts to ACES.

*Achievement*



# English Education Report from School Teachers

## 生徒と一緒に楽しむ英語の授業づくり



奈良 恵子（秋田市立秋田北中学校長）

英語は、生徒たちの夢と可能性を大きく広げる教科だと思います。ただし、英語を使って表現活動ができるようになるまでには、1つの単語をノートに何回も書いたり、教科書を繰り返し音読したりするなど地道な努力が必要です。生徒には『クリカエース』が英語の特効薬だ！』と言い続けて、せっせと宿題ノートや副教材のワークを集めて赤ペンで激励してきました。そして授業では、うろ覚えでも少々正確さに欠けても、伸び伸びと自己表現ができるような授業を試みてきました。私の今までの授業実践の一部を紹介します。

①英語の歌の発表会：今月の歌を決めて、授業の導入に英語の歌を歌いました。最初はアカペラ、次はCD演奏と一緒に、仕上げは歌詞を暗記してカラオケバージョンで歌います。年に2回程度の発表会では、グループで動きを加えてパフォーマンスを披露します。

「Stand-by-Me」を発表したグループが、清掃用具箱から取り出した箒のエアギターとモップのスタンドマイクを使って歌い、クラス全員を巻き込んだ熱いコンサートになったシーンが今でも目に浮かびます。

②物語の音読発表会：教科書の Let's Read では、読み取り活動後、グループで表現豊かに音読するパフォーマンステストを行いました。ピクチャーカードを使って動画風に編集した画面を流し、学級の観衆は画面だけ見ながら、情景や心情が伝わってくるかお互いに評価します。表現豊かに音読できることを、読解教材のゴールとしました。

③スキットコンテスト：Let's talk や各 Unit の Scene2 の会話から1つ選び、自分たちでオリジナルな工夫を加えながらスキットを作成し、小道具を使って発表会を行いました。電話での会話では、声色を変えて居留守を使おうとするやりとりなど、子どもらしいアイデ

ィアで思わず笑顔になる名演技が多く登場しました。

④ALT の母校とスカイプで文化紹介交流：日本文化を英語で紹介する活動では、ALT の母校のオーストラリアの高校と、交流授業を実施しました。ペアでテーマを選び、柔道着を着て技を披露したり、風呂敷で実際に物を包んで見せたりしながら紹介した後、高校生の質問に答える交流です。時差も少なく、スカイプで手軽に交流ができ、生徒にとって貴重な文化交流となりました。

⑤「私の英語史」作文：3年間の最後の授業では「私の英語史」というテーマで、15才までの自分と英語との関わりについて作文を書いてもらいました。野球部のエースで、英語の授業ではなぜかとても静かになってしまう生徒が「英語は得意でなく自信はないけれど、win という好きな単語が見つかりました。試合に勝つだけでなく自分に勝つ人になりたいです。」と書いていた作文が心に残っています。

英語教育はエポックの時代を迎えています。素敵な生徒たちと、何が飛び出してくるのかわくわくしながら毎日の授業を一緒に作ることが、英語教師の醍醐味です。

## Student-centered

## 特別支援教育で思う英語教育の楽しさ



南 彩瑛（秋田県立能代支援学校 教諭）

特別支援学校では、英語教育活動を頻繁に行う学校は少なく、私が勤務する学校もその一つです。年に4回ほどある「英語活動」では、子どもたちに英語を理解させることは望んでいません。異文化理解を目的として行っていますが、もちろんほとんどの子どもたち



の頭の上には「??」が見られます。しかし、講師として来校するALTの魔法にかかれば、子どもたちはたちまち笑顔で英語を発音しだすのです。そんな彼らを見て私は思うことがあります。彼らにとって英語は、「楽しい」「憧れ」「かっこいい」「不思議」といった感情とのふれあいの場なのです。彼らは、英語を聞いたり、真似して発音したりすることで、心を動かされながら思い思いに楽しんでいるのです。



*Akita Kenritsu Noshiro Shien Gakko*

特別支援学校で働いて2年が経とうとしています。「英語は話せてなんぼ、使えてなんぼ」と思っていた私が、コミュニケーションを苦手とする子どもが多く通う特別支援学校で、新たなコミュニケーションツールとしての英語に出会うことができたような気がします。特に、中学生との英語教育となると、こんなにも楽しそうに英語を学ぶ…いや、英語で学ぶ姿は、特別支援学校ならではの楽しさとも言えるのではないのでしょうか。

## *Emotions*

授業力向上を目指して・・・

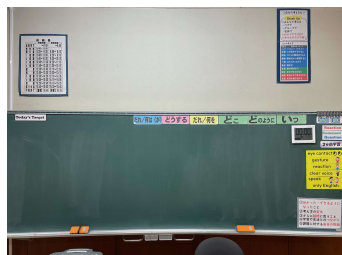


田口 初音（鹿角市立花輪中学校 教諭）

平成三十年三月に秋田大学を卒業し、一年の講師経験を経て、現在の学校に初任者として赴任しました。それからはあっという間に時間が過ぎ、今年で三年目となりました。

講師時代も今も子供たちと過ごす日々が充実しており、この仕事に携わることができていることをありがたく感じています。その一方で、経験を積みほど（三

年目なのでさほど積んでいませんが・・・）私自身の課題が次から次へと出てきます。「もっとこうすれば良かった。」「どうしたらこの力を伸ばせるのだろう。」「悩みは増える一方です。



*English Language  
Learning Classroom  
at Hanawa JHS*

私が今現在感じているのは、その言語材料を用いるための目的・場面・状況の設定の難しさです。例えば、ALTの先生に友達や地域のことを紹介するような場面を設定すると、生徒たちはそれはもう張り切って頑張ります。

しかし、毎回の単元でALTの先生に伝える活動を行うことができるのも限らないのが現状です。その場合、英語を使う必要性や教科横断的な視点など、多面的・多角的な考え方をさらに働かせ、場面を設定することが求められます。そのときに、私にはその材料や経験がまだまだ足りないと感じます。悔しいなあと思う毎日です。日々自己研鑽しなければと何度思ったか分かりません。現在勤めている学校では、年に二回授業を見合う会があり、校内の先生方の授業を見る機会があります。また、普段から活発な意見交流をする環境が職員間であり、刺激を受ける日々を送ることができています。この状況に感謝をし、実践的指導力習得のため、授業力をBrush Upしていきたいと思っています。

\*\*\*\*\*

## *Editor's postscript*

In ten years, we'll see some product in us brought by Professor Kazuki Sasaki's seeds of wisdom. Ms. Mio Kimura and ACES members must be feeling a sense of achievement with memories of the 354 sessions. I remember Ms. Keiko Nara's English class probably when she taught at Akita Minami JHS. Every single student in her class looked so happy and motivated. Ms. Hatsune Taguchi always shows me the joy of designing and teaching English class, which has been created with her inquiring mind. Ms. Sae Minami's "英語で学ぶ姿" is something that is ideally and ultimately aimed at in English class. We hope this issue will bring you some food for thought this autumn.

Editorial board: Yoshimi MIYAKE, Masako SASAKI